
虞美人草の咲き誇る場所 ～ 霸王別姫 ～

麻戸 槲來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虞美人草の咲き誇る場所 ～霸王別姫～

【Nコード】

N4074U

【作者名】

麻戸 槲來

【あらすじ】

誰からも恐れられ、強引なやり方を通す霸王項羽。しかし、そんな彼を最期の時まで愛し抜いた女性がいた。「ただ、民を救いたいそれだけだ」「誰に理解されずとも、お傍にいます」そんな二人の最期の時。

何故だ、嫌だ、止めてくれ！彼女を失うくらいなら…いつそ俺を殺してくれ！！

項羽や劉邦について扱ってはありますが、原作などとは異なる箇所もあるかと思えます。予めご了承ください

原作：項羽と劉邦（司馬遼太郎の小説）

（前書き）

小説などをもとに項羽と劉邦などを扱っておりますが、原作とは異なる表現も多く見られるかもしれません。また作中、項羽よりな表現がありますので、苦手な方はご注意ください。

信じていた主君が我欲にのまれた。

とても賢く、聡明な方だったというのに実に嘆かわしいことだ。

——保身と自身の利益しか考えなくなった人間など、

上にたつても悪戯に世を混乱に陥れるだけであろう。

このままではこの国はだめになってしまう…。

もしもわたしが、義ぎのために主君を殺めても、
おまえは隣で笑ってくれるか？

『ええ、私はいつも貴方様のそばにおります』

そう言つて笑った彼女は、今までで一番きれいだった。

？
？
？
？
？
？
？

乱世、その表現が一番ふさわしいだろう。

そんな中、わたしは後に虞姫のちぐきと呼ばれる女性と恋に落ちた。

彼女は虞美人などとも呼ばれていたが、彼女に出会うまでは鼻で笑っていた。

華美な衣装をまとい、派手な化粧をしているだけだろうと。

ただ彼女を一目見て、今までにないほど心臓が脈打つを感じた。
まさしく彼女は美しかった。

豊かな黒髪はつやつやと輝き、一点の曇りすらも見られない白い肌は、国中の
女が羨んだと聞く。

自らをめかしこみ、いかに他たより有利に立つかということしか頭に
ないほかの

貴族の女とは違い、彼女は知的でもあった。

そのため、朴念仁と呼ばれ女性と付き合うのは不慣れな俺ですら、
気負わずに

彼女との時を楽しむことが出来た。

難をあげれば、そこいらのふ抜けた男どもより知性的であったため、
言い包くめら

れんとして、必死に言い返すだけの気の強さがあった。

だが、そこいらの何を考えているのか分からない女より、感情に合
わせて素直に

変化する虞姫の表情すらも、俺にとっては魅力的だった。

いつだったか、俺は彼女に言ったことがあった。

私は世を統べたい訳ではないのだ。

ただ民を救いたい。

それが叶うのなら、べつに富も名誉も必要ないと考えている。
しかし、それが出来る…

民を救える場所にたまたま私がいるのだというのなら、
わたしは喜んでこの身を投じよう。

おまえはこんなわたしでも慕ってくれるか？

苦勞をかけるしか能のない男に、ついて来てくれるのかと。

その時、彼女はおれの瞳をじっと見つめ、

『ええ、私はいつも貴方様のそばにおります』

と、それだけを応えて微笑んでくれた。

言葉数が少なかったからこそ、そこに含まれる気持ちに触れられた
気がして

嬉しかった。彼女ならきつと、俺を裏切ること落胆させることも
ないだろうと、

心の底から信じる事が出来た。それなのに…。

『王、劉邦の軍がとうとう攻め込んで来ようとしております。
ただちにお逃げを』

『何故、わたしが尾を巻いて逃げださねばならぬ。やつが来るなら
迎え撃つ』

までの事。下らぬことを申してないで、とっとと戦う用意をせぬ
か！』

『ッしかし、そのようなことを申しましてもあちらの軍勢はこちら
の倍を
いきます。その上、こちらには虞姫さまを始め、侍女や戦えぬも
のが多く』

おります。王、どうぞご判断を！』

劉邦に追い詰められ、先の戦いで負け帰った後だった。

仲間に裏切られ、軍勢はどんどんあちらが有利になっている。

その上、周囲を取り囲まれた今となっては、討ち取られるのも時間
の問題だろう。

最期に一矢報いることは、出来ないだろうか…。

焦る一方で、疲れた心とからだを安らげようと考え、久方ぶりに会
う虞姫を晚餐に

誘い、満喫している時に受けた報告だった。

思わず、苛立ちのまま舌打ちをする。

せつかく虞姫の三国一と呼ばれる剣舞を見られたのに、奴は愛しい

者との別れを

惜しむ時間すら与えてはくれないというのか。

『…虞姫よ、別れ惜しいがここでお前とも別れなければならぬようだ。

たとえ今逃げ出したとしても、気休めにもならぬだろう。

どうせなら、わたしは己おのれの義を信じて、最後まで戦いたい…』

それを伝えた時、虞姫にどんな反応を返されるのか予想できず、彼女を

直視せずにいた。…不甲斐ない。己の義を信じてなどよく言えたものだ。

所詮しよせん、俺は周囲に理解されることも、民を救うこともできずに終わってしまう

のだろうか。ただ、なんとしても彼女だけは逃がさなければいけない。どうか

願わくは、次はもっと優しく争いなどとは無縁のいい男を選んでほしい。

自身の想像にすら嫉妬し、きつく拳を握り締めた。

その時の俺は自身の思考にはまっていたせいで、虞姫が起こした行動に瞬時に

反応することが出来なかった。

『王、どうか嘆かないでくださいまし。

誰に理解されずとも、私は貴方様を信じ、ついて行きます。

——けれど、それが貴方様の戦いの妨げになるといつのなら、

私は喜んで

『この身を絶ちましょう』

何を…彼女は、言っているのだ？

虞姫のおかげで救われているというのに。これ程までに追い詰められた状況下で、

悠長に晩酌など出来るのは、ひとえに彼女のお陰なのだ。これまで何度も理解

されず苦しんだ時も、裏切られた時も何時だって彼女が支えてくれた。

『愛していますわ、項羽様』

ザシユ

剣舞で使っていた剣が、彼女の首元で踊った。

一瞬後に噴出した血の色は、まるで彼女が好んでいた赤いヒゲナシの花のよう

だった。こんなにも美しい鮮血をみたのは初めてで、事が起こった刹那、目のまえで起きた事を理解することが出来なかった。

『虞姫ー！！』

頭では理解していないというのに崩れ落ちる彼女の姿を見て、俺の

喉からは自然と

悲鳴が上がっていた。

わたしの嘆きを皮切りに、劉邦たちが屋敷に侵入してきた。

——嗚呼

何故だ、何故だ、なぜだ、なぜだ！

そんなにわたしと共に逝くのが嫌だったのか？

だったら、いつそのこと俺を殺してくれ

嫌だ、嫌だ、いやだ、いやだ

何の為に、わたしがこの世を平和にしようとしたのか、
一番近くにいてくれた君が分かっていなかったのか？

止めてくれ、止めてくれ、やめてくれ、やめてくれ

彼女とすごしたこの場所を……彼女が最期に選んだ場所を——。
どうか誰も、壊さないでくれ

その後、健闘もむなく覇王^{はおう}と呼ばれた男は劉邦に討ち取られ
彼女のあとを追う事となった。

？
？
？
？
？
？
？

貴方への不満が……。城内に全くないなどどうして言えましょう
貴方様のお心は、あまりに真っ直ぐすぎるのです

それ故、周囲には理解されにくく。その苛立ちを素直に表現なさる
から、

一層、貴方様は恐れられるでしょう

——私には一度たりとも、怒鳴ったりなされたことは無いという
のに。

嗚呼、どうしてもそんなにも貴方様は不器用なのですか。

私はそのお優しい姿を、皆に見せて差し上げたい。

弱い者には手を差し出し。迷える者には助言を与える。

そんな御方が、この世に何人おられますか？

貴方様以外に、私がついて行きたい人などおりません。

だから周りに何と言われようと、貴方様の傍に居られる事が私の幸
せであり、
望みなのです。

しかし時は流れ、ひとは変わり。

志を共にする者として、信頼していた者たちまで彼を裏切った。

滅多に見ることのない、貴方様の涙に胸が詰まるようだった。

だからせめて、最期くらいは心おきなく戦わせてあげたいと感じた
のです。

誰に理解されなくとも、貴方様を愛しております。

どうか忘れずにいて下さい。こんな女がお傍にありました事を…。

貴方様の、優しい眼差しが私を向くたびに、私の胸は人知れず高鳴って

ゆくのです。

どうか気付かずにいらっしやって下さい。

できれば…もつと違う形で出逢いたかったと、弱い心が申すのです。

決してなかった事にはしないで下さい。

貴方様のお陰でこんなにも幸せになった女が、
此処に確かにいたのです。

虞姫が自ら命を絶った場所には、ヒナゲシの花。またの名を虞美人草が、

咲き誇っていた。

（後書き）

虞姫は正確な名前が分かっていないため、ほかにもいくつか呼び名はありますが、こちらを作中で使わせていただきました。

項羽は残忍とされていますが、虞姫との馴れ初めを先に知った私にはそれだけだとは思えませんでした。ぜひ、興味がありましたら京劇などの作品を見てみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4074u/>

虞美人草の咲き誇る場所 ～ 霸王別姫 ～

2011年11月17日19時14分発行